

小田原史談

第 146 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20

一枚の古い写真が語る

時代の移り変り

この写真は一目見れば板橋見付に立つ大公孫樹であることが誰にでも判る。おそらく大正時代に撮ったものである。道路の巾の狭さ、両側の家々の貧しさがそれを教えてくれる。別掲の現代の写真風景と比較してみるとすべてが一変しているのに驚かされる。昔の道路東海道は幅員が八メートルくらいであったが、現在のように十六メートル幅、補装路になったのは関東大震災の直後である。しかもこの写真では箱根に向う道路は直進しないで右折している。現在ののように直進するのは戦前のことだが、昭和三十一年になると、湯本通いの電車は廃されて市内電車は板橋駅止りとなり、やがてこの街路軌道も取り外された。戦後社会の凄まじい変革はモーターリゼーションに始まったことは言うまでもない。この古い写真に見る荷馬車など現今では見ることが出来ない。

過日この板橋見付の大公孫樹を訪

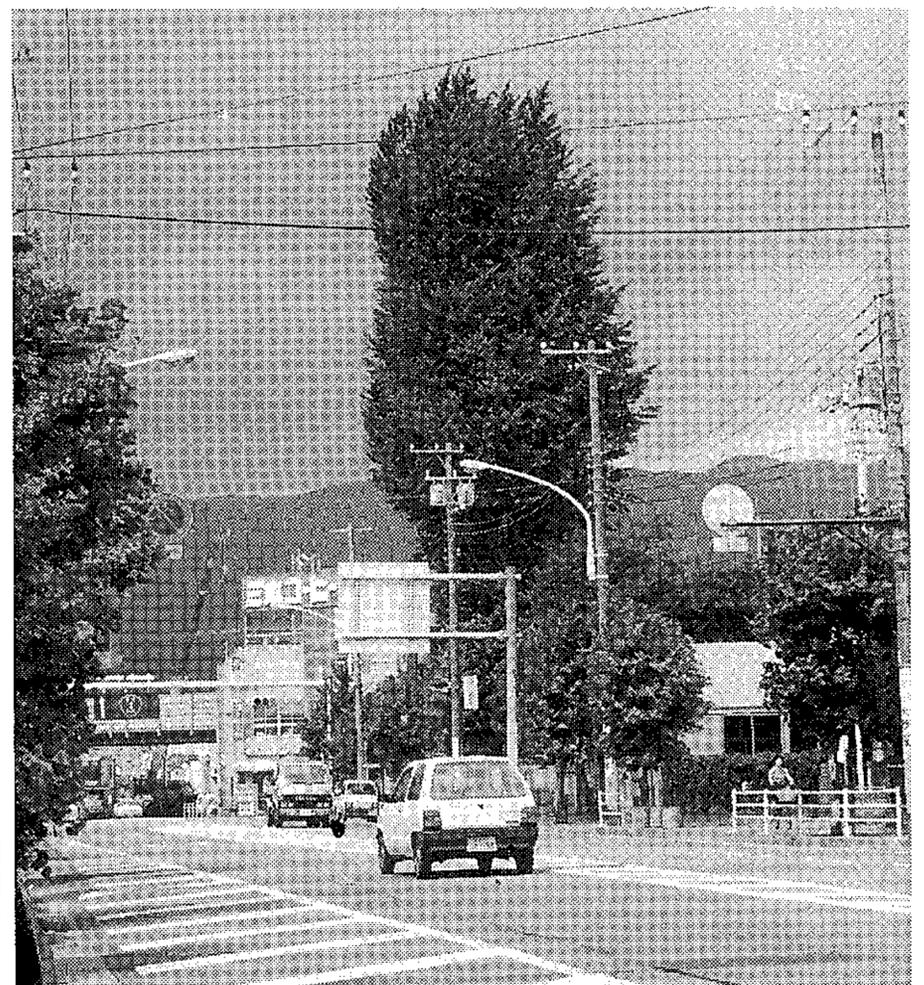
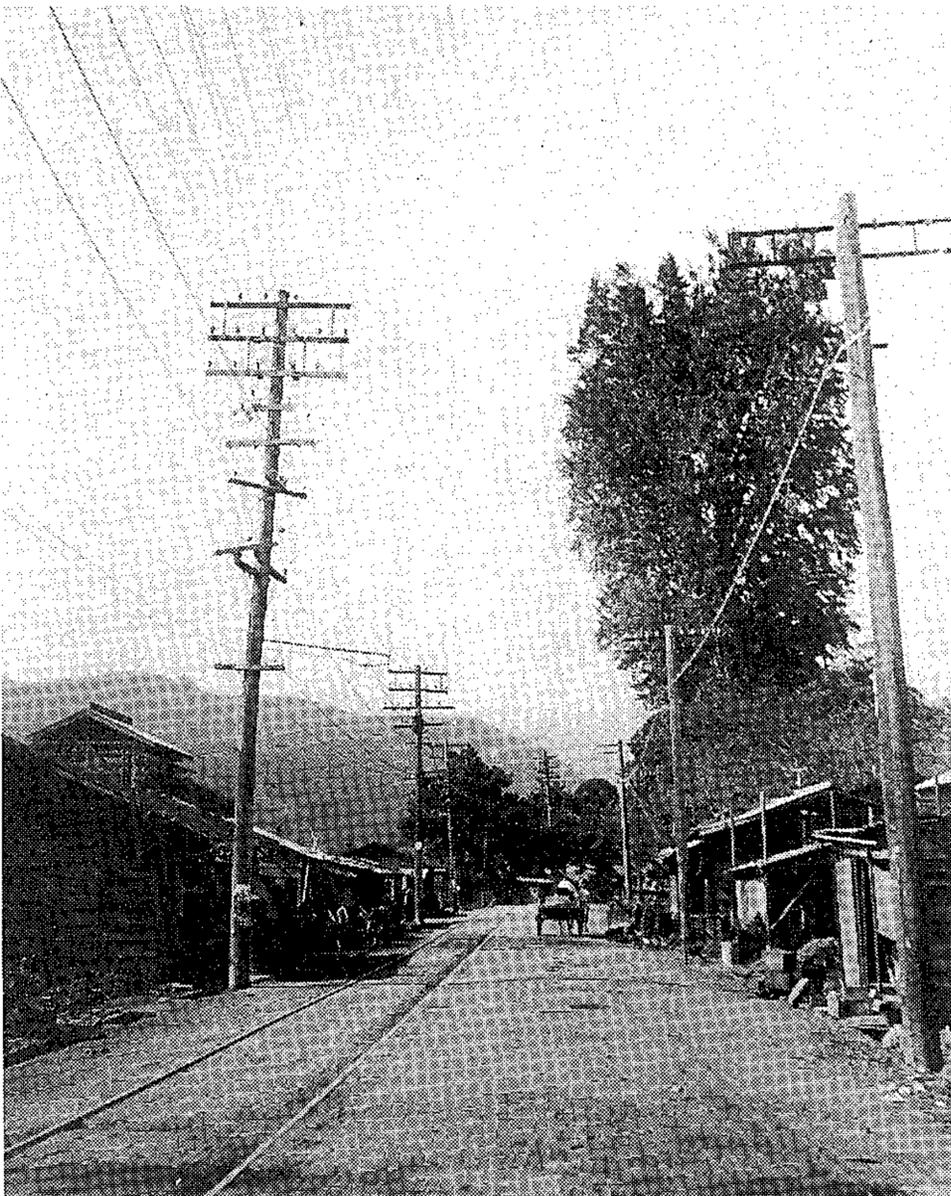
ねたが、この樹は真言宗光圓寺境内に在り、この寺は稲葉氏が小田原を領した時代、慶安の頃、春日局を開基として創建されたと伝えられるから、おそらく三百五十年以上の樹令であろう。傍らによって仰ぐと胸高直径約二メートル、樹高は二十メートル近いであろう。

幕末当時、板橋見付は虎口を為して小田原藩上方口の重要な護りであった。明治維新箱根戦争に際しては、この上方口番屋において藩士山田竜兵衛、小泉彦蔵の両者が誤って官軍々監土州藩士吉井顕蔵を殺し、のち官軍によって斬首されると言う悲劇をこの大公孫樹は具さに見ていたのであろう。屋移り年変って現在のこの地は箱根越えの国道一号線となり、昼夜を分かたず車が輻輳疾駆する大動脈となっている。維新以来百二十余年、往時を偲ぶもの、この大公孫樹一本となってしまう。

(高田 喜久三)

← 大正末頃の板橋見付 (尾崎 正氏所蔵)

現在の板橋見付 ↓



小田原叢談(六)

石井富之助

北へ流れ東へ流れる

小田原の中心街を流れる川は東へ流れ北へ流れ、また東へ流れている。そういうとだれでも一瞬妙な顔をする。

川は普通山から流れてきて海へ入る。小田原には南に海がある。だから小田原の川は南に流れていると簡単に考える。現に平野部に

旧七枚橋(浜町二丁目あたり)



これは実際に川の流れをたどってみればすぐわかることである。本町小学校の南側の新道にそって西から東へ流れる小さい川がある。この川は料亭柏又のあたりで方向を北にかえ、市民会館、小沢病院の前を

ある酒匂川、山王川、森戸川などみんな南へ流れて海へ注いでいる。それを見ているから、中心街の川も同じく南へ流れていると考えるのは当たり前のことである。そこへ北へ流れ東へ流れるといわれると、ちょっと意表をつかれた感じになるのは無理もない。

流れ、郵便局のところまでたむきをかえ、平井積善堂の側を東へ行く。そして、旧台宿の裏側を北へ流れて大工町に出ると、そこには駅前通りの方から流れてくる二メートルほどの川があった。それと合流し、またまた東へ向い、蓮上院や善照寺の前を通ってついには山王川に入っているのである。まだこのほかにも同じような流れが裏町、竹の花にもある。

こういうわけで、城山、駅一帯の水、さらに荻窪、久野の水はほとんど山王川に集まる。だからちよっと大雨が降るとまず山王川がいっぱいになり、つぎは新玉小学校から旧七枚橋付近が床下浸水し、果ては緑新道まで床下を洗われることになる。そんなことがしばしばあった。この水の被害を解消するために先年二本の暗きよが作られた。一本はお茶壺橋から箱根口交差点で国道の下をくぐり、まっすぐに海に達するもの、もう一本は旧七枚橋の蓮上院付近から南へ、これも新宿で国道をくぐって海に通ずるものである。

この二本の暗きよができてから洪水の被害はほとんど解消された。わたしのように町のどこが高くてもどこが低いか、川がどんなふうに流れているか、目で見て知っているものにとってはなんでもないことだが、そういうわたしでさえ、関東大震災の時の焼け野原を見る機会がなかったら、市民会館から南へ突きあたる国道、本町小学校から御幸の浜通りへ出る道、新宿の西のはずれの蹴上坂などがいくらか坂になって、いることは知っていても、その高低の差がこんなにもあったということはまるで気がつかなかったに違いない。川の流れはそのほとんどが道路の下になってしまっているのだから、ちよっと見ただけではわからなくなってしまう。

しかし、小田原のことを考える場合、この地形を無視することはできない。歴史の研究者というものはまず第一に資料を重視するので、地理関係では最も信頼できる国土地理院の二万五千分の一地図などを基礎資料として使う。ところがぐあいの悪いことには、この地図の等高線は十メートルを単位としてひかれて、いるのだそうで、もしそうだとすると小田原の町の高さはその範囲の中のことなので、何も表現されていないことになる。

したがって遺憾なことながら、この最も正確な地図もこの点では物の役に立たないことになり、時と場合によっては間違った判断をしかねない。よくよく注意すべきことであろう。

小田原の浮世絵 (四)

岩崎宗純

(七)石橋山合戦の浮世絵

治承四年(一一八二)八月十七日、源頼朝はかねて連絡のあった北条時政ら伊豆・西相模の武士たちとともに、伊豆国目代山木兼隆の館を襲撃し、平家打倒の旗を上げました。

同月二十日東国を目ざして伊豆から相模に入った頼朝は、小田原市南部の石橋山で、大庭景親の率いる平家軍三千余騎と対峙します。平家軍は頼朝軍に馳せ参じようと三浦を出た三浦義澄ら三浦の一族が、頼朝軍と合力することを恐れ、二十三日一せいに攻撃を開始しました。

頼朝は数の上でも勝る平家軍に惨敗し、わずかの郎党を連れて土肥杉山の洞窟に身を隠します。

一命を得た頼朝は、その後、土肥実平の助けにより真鶴から海路安房にのがれ間に合わなかった三浦一族

と合流、反平家の旗を再び掲げるのです。

武家の時代、中世の幕開けともなった石橋山の合戦は、あまりにも有名な史実ですし、小田原の地が歴史の表舞台に登場する初めでもあります。

浮世絵の世界でもこの石橋山合戦は、恰好な画題としてかなり描かれていきます。江戸後期天保年代になりますと、歌川国芳を中心に源平争乱や戦国動乱を画題とした「武者絵」と呼ばれる浮世絵が、盛んに描かれるようになりませんが、石橋山合戦は、その中でも浮世絵師たちが好んで描く画題の一つだったようです。

さてここで紹介する勝川春亭「石橋山合戦」(大錦三枚続 天保前期 伊勢福)は石橋山合戦を描いたものの中では初期に属するもので、石橋山における頼朝方の佐々木高綱と平家方の大庭景親・梶原景時・海老源

三・俣野景久との合戦の様子を描いたものです。春亭は勝川春英の門人で、風景画の洋風表現に独自の画風を示した浮世絵師ですが、この作品も一般の錦絵とは異なり、限定した色彩表現のなかで、合戦場の荒々しい雰囲気を巧みに表現しています。

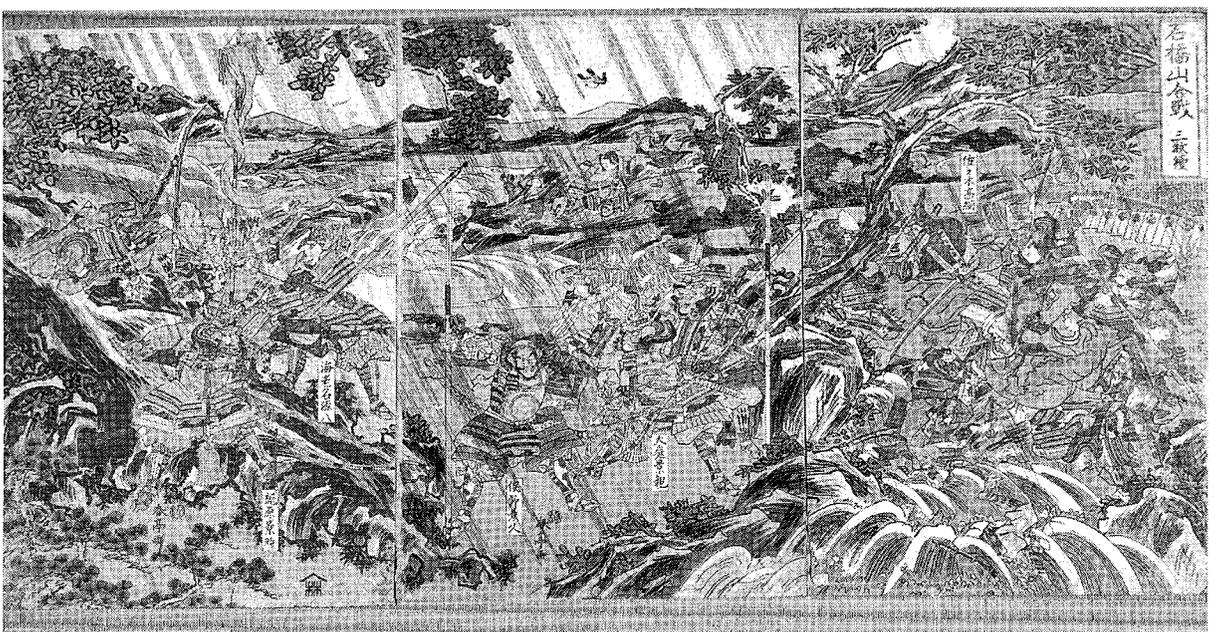
そのほか「石橋山合戦」の浮世絵についても紹介しておきましょう。

歌川国芳「豆州石橋山鷹之崖二源頼朝主従七騎臥木之中二隠ル図」(大錦三枚続・天保前期・伊勢福)臥木の中に身を潜める頼朝主従七騎、頼朝を追って来た梶原景時らの平家軍、組討ちして戦う真田与市と股野五郎など石橋山合戦の様子をパノラマ風に描いています。

歌川国芳「源頼朝石橋山旗上合戦」(大錦三枚続・安政二年・大黒屋)洞窟に潜む源頼朝・土肥実平・同弥太郎と追手の平家方梶原景時・俣野景久・大庭景親の様子を迫力ある筆致で描いています。

歌川国久「石橋山二高綱後殿高名図」(大錦三枚続・安政六年・四木屋)石橋山における頼朝方の武將佐々

石橋山合戦 勝川春亭



木四郎高綱の奮戦の様子を描いています。なお本図には「小泉彫兼」という彫師も記されています。

歌川芳虎「治承四年兵衛佐頼朝石橋山義旗揚図」(大錦三枚続・弘化四く嘉永五年・泉市)石橋山における頼朝軍と平家軍との合戦の様子が描かれています。後方にあがる火煙は、和田義盛によって焼かれた丸子川(酒匂川)周辺の陣屋である、との説明が付されています。

歌川芳員「石橋山合戦」

(大錦三枚続・弘化四く嘉永五年・伊勢屋)石橋山で挙兵した頼朝が、平家の大軍に対戦し敗走、臥木に身を隠す様子と、それと知りつつ、世の盛衰を察し、頼朝を見逃そうとする梶原景時の様子が描かれています。以上石橋山合戦の浮世絵は管見の限り六点ですが、まだ発見される可能性があり、小田原の浮世絵の中でも、独自の光彩を放つ作品群と思われまます。

井細田八幡神社の昭和史(二)

ー創建四百周年に思うー

星野幸一

六神域の整備と 屋根の大改修

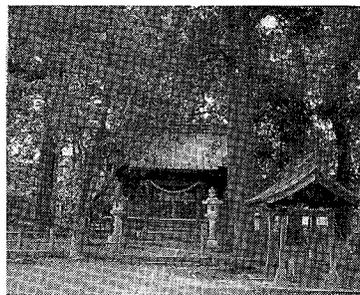
昭和三十一年八月には境内の外周と上、下段の区切りに玉垣が完成した。会員から浄財を募りコンクリート柱に氏名を刻して入朱、一本三千円であった。

昭和三十一年三月には境内を児童遊園地として市に設置申請を行い認可されて

いる(福祉健康部児童課所管)。都市化が進み木々の緑は消え空き地は有料駐車場に変わったので境内を遊園地として保持しようというのである。

昭和四十四年九月には境内西側の外縁の一部が道路拡張のため売却され、その土地代金を基金として木造トタン葺の舞台小屋が完成した。是により小屋掛けの

境内上・下段の区切りに玉垣が完成 (昭和三二・八撮影)

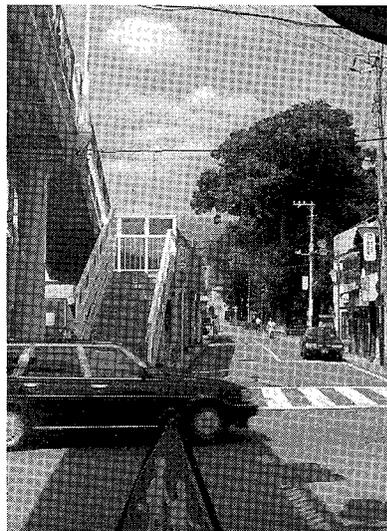


丸太や材木の運搬、組立解体、資材の後片付の作業は省けたが大衆演劇というか小屋掛時代の芝居が懐かしいような気もするのである。

玉垣と舞台小屋は当時氏子総代であった清水義三氏が発案者として記憶に残っている。

昭和五十年四月には緑を豊かにする市条例により鎮守の森は市の保存樹林に指定され(公園緑地課所管)緑が減少する中で巨樹に対する保護の動きが表れてきたのである。市街で森を近景として眺めることはぜいたくな時代だがこの地は扇町に残された唯一の聖域であり昔も今も人々は森に心の安らぎと潤いを求めてき

たことだろう。上述した神域の整備が進む中で昭和五十三年例祭日を変更するというエポックメイキングな出来事が起こった。



八幡通りR255交差点からみた鎮守の森(平成1.7.29撮影)

四十二区自治会長 別

生実、同副会長

星野幸一、小沢隆

四十三区自治会長 石

川敬造、同副会長

川面義人、荻野忠数

氏子会代表総代

高橋次男、浜野英三

氏子総代

横溝欣一、喜多卯之

助、小柳良雄、星野

喜久雄、遠藤孝、中

戸川浜太郎、上原昇

齊藤春雄

更となったのである。現社殿も新築以来五十有余年の歳月を経て屋根のいたみがひどく神社の尊厳をそこなう状態となったので昭和五十五年建設委員会を結成、会員より修築資金の寄付を募ることになった。

建設委員(順不同)

募金目標一千万円、募金期間六ヶ月、氏子の総力を集めて修築資金の浄財を募ったのである。幸にして目標額を上回る一千三百五十万六千三百円を達成、予定通り工事が進行したのである。

昭和五十六年三月一日起工、八月二十三日落成式と

八幡神社屋根修復工事見積り書 (昭和55.7.26)

		円
屋根工事		
奥殿	銅板丸棧葺 (13.5坪) 本棟鬼板大2	1,603,500
幣殿	銅板丸棧葺 (7坪) 棟谷	422,000
拝殿	銅板丸棧葺 (35.5坪) 本棟 下枝機 鬼板大2個、中4、小4個	3,757,500
お水屋	銅板 小丸棧葺 棟 鬼小2個	315,000
足場工事		
足場	外部棚足場 上屋根足場 古材処理、取片付	1,058,000
木工事		
大工工賃	40人 釘、金物	510,000
材木、棧、大貫		213,200
土板張替	材木手間 (30坪)	150,000
諸経費		1,430,000
	始工式 (3万) 御芳名板 (20万) 会議費 (10万) 事務印刷費 (10万) 完成費 (100万)	
予備費		540,800
合計		10,000,000
備考	1. 屋根下葺はルーフィングとする 2. 銅板の厚みは0.35耗とする 3. 銅板は昭和55年7月現在の相場で見積もる 4. 工事期間は約6ヶ月とする。	

いう運びであった。

七 例祭行事と露店

例祭は町中あげての秋のメイン・イベントである。

宵宮には草角力を奉納、本祭では午前十一時から式典、祝典が行われ午後零時三十分から神輿の宮出し、山車の巡行、余興は午後六時から十時までである。

戦前は草角力の全盛時代であった。子供の部(小学生から高等科の生徒まで)は午後三時から、続いて大人の部は午後八時頃まで、賞品は予算枠外に区内各商店から沢山の寄付が寄せられ

たので充分であった。

取口は二人抜き、三人抜き五人抜きもあり体は小さくとも技を使う子供もいた。

大人の部は地元の兵隊帰りや、足柄上郡(関本、山北、駿河小山方面)足柄下郡(江の浦、酒匂、前川方面)から屈強の若者たちが集い、勝敗を競う晴れの舞台でもあった。他地区の勝者が沢山の賞品を手を誇らしげに引揚げていったのを覚えて

いる。子供角力の行司は建具屋の石井清松氏や地元で角力の猛者であった海軍出身の横溝理三郎氏、近衛騎兵出

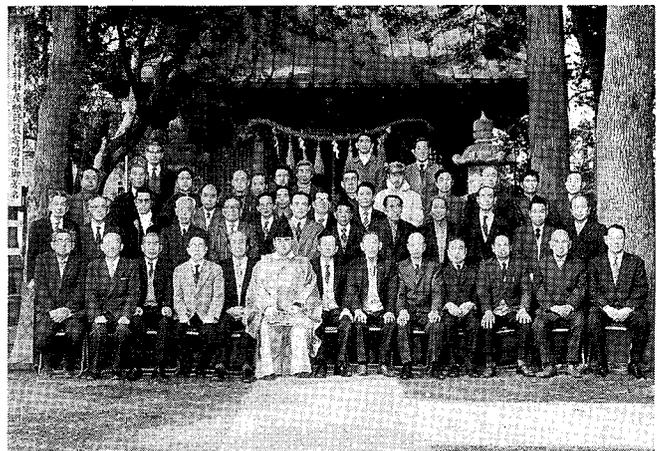
身の鈴木平八氏がつとめたのを覚えて

地区の相撲協会関係者に依頼したものか大人の部では行司が正規の装束を着用しており軍配裁きも鮮やかであった。

八幡神社の角力は「相模風土記」にも収録され四百年の伝統の下、近郷近在では名が通っていた。草創期の村人たちが神前に奉納した角力では当時の村の風景や、境内の様子、若者たちの取組みはどんな姿であったろうと遙かな幻想に駆られるのである。

説のようなものはないが、天の恵みに感謝する農耕祭儀は、草角力の原郷であり、農業社会から工業社会、情報社会へと歴史が変貌する中でその姿や形もおのずから変わったことだろう。戦後は戦没者による影響や世情の変化から土俵上禪一つで体力と技で勝敗を競う角力は敬遠され、他地区の挑戦者や地元青壮年層の取り手がなく、大人の部は廃止になったが、子供角力は継承され少年の健全育成に一役果たしている。

神輿は昭和二十三年以降三十三年までは大人、子供の二基が町内を練り歩いたが三十四年から子供の神輿だけとなった。青壮年の担ぎ手が減り人足割当も儘ならず、大人の神輿は整備費も嵩み、爾来神前に据え置くことになった。今のところ大人の神輿が町内を練り



八幡神社御神体遷宮式並びに屋根修復起工式前から二列目左端筆者(昭和六、三、一撮影)

歩く壮観を見る機会はなさそうである。

子供の神輿も近年児童数の減少から男児だけでは担ぎ方が不足、平成元年から小学校四年生以上の女兒も担ぐようになった。担ぎ手の三分の一は女児でありワッショイワッショイの掛け声も華やぎ男女共演の時代を迎えたのである。

神社には山車がなく昭和三十年から道祖神の山車を巡行することになった。今

戦前の祭り風景。
村内を練り歩く大人の神輿
(撮影年月不詳)



年の祭礼では大人の叩き手に交わって小学生の女兒二人が締太鼓を叩いて居り撥擲も美事であった。

神輿が宮入りする頃は舞台の余興も乗り、山車から響き渡る小田原ばやしの調べでフィナーレを飾り、神輿を中心としたパフォーマンスを展開、祭の雰囲気は最高潮に達するのである。太鼓橋の前では何度もダウンを繰返し、担ぎ手も見守る人々も一つのものに向って収斂してゆくとき、神社の尊厳と素朴な子供たちのエネルギーが爆発する伝統文化の素晴らしさに魅了されるのである。
余興は小屋掛の芝居であっ

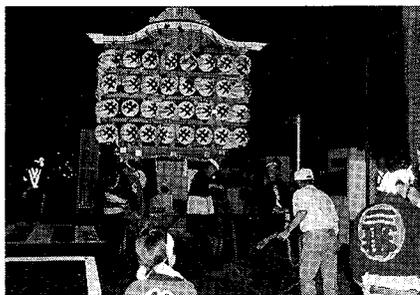
揃いの浴衣、祭礼笠姿の
祭典委員、山車係り公民館前
後列右より四人目筆者
(昭和三六、九、一九撮影)



た。篤職の指導により祭典委員は材木の運搬から小屋の組立、シート張り等作業も大変であった。

たしか小八幡あたりで海岸寄りの松林の中に旅廻りの一座「市川錦吾劇団」の座長宅があり小道具や衣装をとりに行き芝居が終れば送り届けたことを覚えていた。柳中戸川製粉のトラックを借用、大きな茶箱を十個位運び詰所に帰ってきたのは夜中の十二時を回っていた。
今日では考えられないことだが、出演料を払って祭典委員は小道具や衣装の運搬まで受持ったのである。
舞台の幕引きは委員が当

町内の巡行を終えた山車
足柄小学校前にて
(平成二、九、一六撮影)



り、演目は「明月赤城山」「二本刀土俵入り」や「暎の母」等の股旅ものと浪曲や舞踏であった。ヤジや声援が飛んで舞台と観客は熱気に包まれたものである。

昭和四十四年には舞台小屋が出来たがその頃、余興は旅廻りの一座から芸能プロダクションの時代を迎え演目もコントや奇術、歌謡曲等趣向がガラリと変わったのである。
ラジオ、テレビの影響や、最近のカラオケブームから飛び入り歓迎ののど自慢もあり出演者には賞金を進呈、余興は観賞型から参加型に変わってきたのである。
祭礼の情趣を盛り上げた

のは神社前通りから境内にかけて所狭しと並んだ露店である。戦前の出店風景をみるとリヤカーを自転車で曳き竹竿、シート、販売台や商品を満載して集まってきたが戦後はトラックやライトバンにvari照明もカーバイトを水で溶かすアセチレン灯から電灯に様変わりした。

露店には子供向きの玩具や食べ物が多かった。カルメ焼、わた菓子、おでん、焼いか、しんこ細工、氷まんじゅう、アイスクリー等その場で作って売るのが多かった。

アセチレンガスが匂い青い炎が映し出す夜店の雰囲気は食品衛生上好ましくない面もあったが、画一的にキレイに包装された今日の菓子に比べるといきいきとした生彩があった。新聞紙で作った三角袋の氷まんじゅうにはイチゴやレモン等、種物の色が鮮やかであり、とんがり帽子のウエハースに杓子で撫でつけながら盛った目の荒いアイスクリーでも子供たちには魅力であった。小さな銅鍋に入れたザラメをかき廻している内にうまい具合にプウッと膨れ

上ってくるカルメ焼きや、小さな鉄をちよいちよい小器用に動かしてみるみるうちに、鳩や鶴が出来上がり表面には甘い蜜をかけたしんこ細工等どれもその場で作って売る露店には夢があり芸があった。

焼いかの店では火床の金網に垂れをたつぷりつけたいかを並べ焦げて煙があがると食欲をそそる匂が周囲に漂うのである。紐つきのコルク栓を弾き出すバネ仕掛けの鉄砲や、美しい水中花。十糎程の枯れた女竹の先にゴム風船をしぼりつけ根元に赤や黄色の小羽根をつけた笛を子供たちは力一杯吹いて膨らませ口を離すと風船は萎みながらプープーと鳴り、境内のあちこちで響いたゴム風船も一興であった。

近年例祭当日の午後は神社前の通りを交通安全対策上歩行者天国としているが、そこには私たちのノスタルジーをかきたてる数々の思い出があったのである。

八戦後のルネッサンス

氏神様の初詣は従来から行われてきたが昭和五十年代後半から神社にとって喜



材木屋綺談 その四

たかた・きくせん

この話は昭和十年頃のことである。私がまだ材木屋の若旦那時代。私の店先には高さ三米巾一米五十糎厚十二糎の巨大な杉の盤二枚が飾ってあった。ある日、店先に當時として珍らしい自家用車をとどめ、一人の品の良い老人が運転手を伴って入ってきた。「材木屋さん、表

ばしい迎春風景が現出したのである。区民の人々が最近の観光化された神社仏閣への初詣をやめて八幡神社にお詣りする人が年毎に増えてきた。大晦日おひそかから元旦にかけて井細田一区(旧四十二区)、四十三区の氏子会役員、祭典委員の奉仕により境内の清

掃、神社の飾り付け、篝火の準備、天幕を張って樽酒、甘酒、しるこの接待等の準備をすることが恒例となってきた。大晦日の午後十一時を過ぎると参拝者は太鼓橋前に行列し除夜の鐘を合図に初詣が始まり、明方まで大変な賑わいである。篝火に点火、赤々と燃え

る炎が映し出す神域は原初を思わせる幽玄の世界であり、お水屋にて口をすすぎ初詣を済ませた氏子たちは賀詞を交しながら樽酒や、甘酒、しるこの接待で和やかなひとときを過ごすのである。戦後の四十年は様々な変化を遂げてきたが、これ等はすべて社会や時代の要求を背景としたものであ

り祭政分離は神社にとつてルネッサンスともいうべき変革であった。習合の時代にみた敬神思想が蘇り、聖戦の思想的裏付けともなった国家神道の影は消え、素朴な信仰行動から神社に土着性が帰ってきたのである。神域の整備や鎮守の森の保存樹林指定、境内の児童

遊園地化、例祭日の変更や近年にみる迎春風景にしてもルネッサンス期に発酵成熟した町の表情ではなかるか。

九 結 び

天正十九(一五九)年の創建以来、四百年の歴史を刻んできたのだが振り返ってみると昭和期の六十年は激動の時代であり私たちの体験した戦前、戦中、戦後というプロセスは一身にして三世を経る時代でもあった。戦後の世代交代が進む中で創出され或は変化した祭礼像は昭和の伝統として定型化され平成時代へ継承されたのである。(了)

にある杉の巨きな盤はいくらですか」この盤は大き過ぎて客が仲々つかず十年も棚ざらしになっていたので、上客到来とばかりに父を呼んできて応対した。私は父と相談して「二百円でございます」

「旦那さんはどちらの方ですか」「いや、私は安田善次郎の身内で善衛と申します。今は八王子で隠居の身、好き勝手なことをやって暮していますよ。ちょっとお待ちなさい」安田善次郎と言えば安田

「旦那さんほどちらの方ですか」「いや、私は安田善次郎の身内で善衛と申します。今は八王子で隠居の身、好き勝手なことをやって暮していますよ。ちょっとお待ちなさい」安田善次郎と言えば安田

頼朝の隠れ杉で作られた小さな翁面



その当時はラーメン十銭、一ヶ月の生計費が百円足らずであったから思い切った値段であった。ところが老人はいとも簡単に「それでは出直してお金を持って来ますから取っておいて下さい」

銀行創始者の財閥である。老人は一旦車へ戻ってから木屑だらけの手を払いながら「これをあなたに上げましょう」と小さな翁面を私に差し出した。掌に入るほどの小さなものだが、一刀彫の鋭

の隠れ杉であることを信じ、裏面に彫られた「二九六」の番号と共に我が家の秘宝としていまだに大事に所持しているのである。いつぞや史談会で湯河原の城願寺を訪れた時、庫裡の床の間に頼朝の隠れ杉の根株の輪切りが飾ってあったのを見て、私は我が家の秘宝と同じ樹肌であることにいたく感銘した。なお安田善衛翁の話は後日談があるのでそれは又次号に……。



◎近頃評判の小田原・港の朝市
去る七月二十七日(出)小田原市場西側立体岸壁で開かれた「港の朝市」は、その後土曜日毎に続けられ、生きのいい魚介類を生きのいい価格で提供、消費者に好評である。
(七・二七撮影)

「カナダ環太平洋M・R・A 国際会議」に出席して(一)

二宮秀夫

平成元年九月にアジアセンターにて開かれた国際会議に参加された、カナダの実業家ウェブスターさんとM・R・A専従のハートニールさんが大変啓発されて、今年十五年ぶりにカナダで大会をもつことになりました。

両氏より丁寧なご招待をうけ、日本より参加者が少ないのでと住友義輝氏(住友電工監査役 国際M・R・A日本協会会長)よりも電話があり「わたしも議会で忙しいが二日間だけ出席するからお前も行け」とのことでしたので、私も出にくい状況でしたが、意を決して出席することになりました。

り、又その事務所で申請する人の多さにびっくり、更に成田の人の多さにまたびっくり。外務省でパスポートの手続きをした時と比べ日本の国際化がこんなにも進んだかと思無量でした。

六月十四日(木)

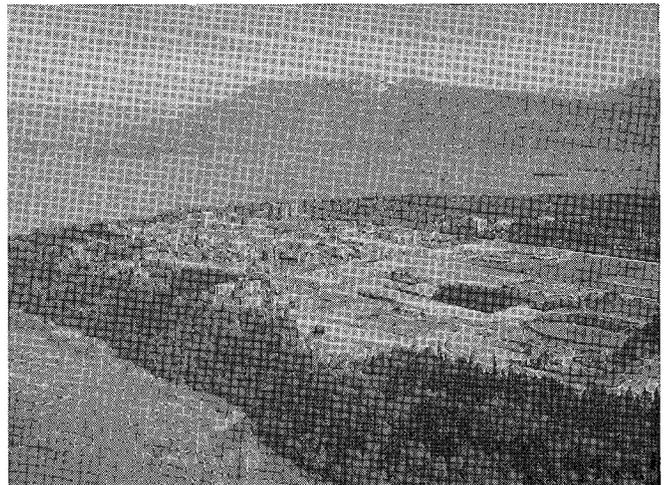
成田出発コンチネンタル

航空の航空券が格安で手に入り、いよいよ出発することになりましたが、満員で十時間あまりよくねむられず、時差ぼけで初日二日目までは頭が痛くなり、会議のお話があまり入らずまいりました。

さて、機は米国のシアトルで乗り継ぎ、双発のプロペラ機でカナダのバンクーバーへ入りました。我々戦中派はほんちに飛行機に乗ったと感じました。

出入口の手続きを二回もしなければなりません。国境の煩わしさを感じました。早く世界はひとつ関門はな

会場のプリティッシュ・コロンビア大学



いにしなくてはならないと思いました。シアトルを出る時検査官につかまりました。それはお寺の水晶玉です。同行のM・R・A職員

の長野さんが苦心して説明してくれ無事通過いたしました。いよいよバンクーバーです。緑濃き広大な入江と岬の町が眼下にみえました。まことに広いの一言です。迎えのワゴン車に乗り、会場のプリティッシュ・コロンビア大学へ到着致しまし

た。いやはや、大学の校地の広いこと又々ビックリ。十七階建の校内のホテルに到着、受付をすませ、部屋で旅装をとき、一息入れまし

た。大会の会

場は、ホテルから三、四百米はなれた、学生生協会館の講堂であります。そして講堂と同じ建物にセルフサービスの食堂がありました。中々大きなものです。ホテルと会館との間には道路が二本通り芝生と植樹で何も建物がありません。まことに広い学校です。

六月十四日(金)

六時三十分から大会開始。時差の関係から日本を出た日と同じ日付です。まずカナダインデアンの人々による歓迎晩さん会から始まりました。その会場は別棟の

学生生協の大舞踏場で行なわれ、十七カ国三百名もの多くの人が出席しました。会は、インデアンの大鼓によるお祈りから始まり、プリティッシュコロンビア州の副総督デビッド・ラム氏の歓迎の辞があり、元オーストラリア特別補佐官のアラン・グリフィス氏による答礼があり、いよいよ明日から始まる会議に向けて参加者の心の高まりを感じました。

ちなみにラム副総督は、中国系カナダ人で、東洋系ではじめてだそうです。この辺もカナダという新興国だから出来たことでしょうし、又これからの各国の在り方も次第にこうならなくてはと思いました。

この日又びっくりしたことがございます。現地の方に同時通訳をお願いしたところ、二人の方が交替でやって頂くことになりましたが、お一人は日本人で、お一人はカナダ人でしたので、少し心配でした。この日の通訳はカナダ人のバレイリー・シーコドさんというひとでしたので、英語なまりの発音に悩まされるかと心配でした。



ところが何とシーコードさんが着物姿で目の前に現れ全く正しい日本語で挨拶されたのにはびっくり、そして感激致しました。呉服屋で着物が売れなくなり日本の民族衣装がどうなるのかと心配している最中に、青い眼のキモノ姿のご婦人にバンクーバーでおめにかかれるとは、まったく意外でした。

私が呉服屋ですと自己紹介すると、肩をすくめて、「あらはずかしい」といわれましたが、なかなかどうして色柄共に日本的なセンスで帯もよく着こなしておられ感心しました。着つけは近所の日本人の美容師さんスピーチされたインディアナ酋長と夫人、通訳のバレイ・シーコードさん



んにして頂いたそうです。まあとにかく通訳のひとつについては先ず安心しました。彼女の日本語があまり流暢なので、あなた日本語のほうが母国語ですかとたづねましたら、三歳の時、開拓宣教師の両親につられ茨城県に渡日され小中学校は日本でおえたそうです。高校の通信教育でカナダのコースを取ったそうです。うまいわけがよくわかりました。

六月十五日(土)
今日の通訳は、カナダ人と結婚された日本人の麗子・リチャードソンさんでした。「融和の流れを起すために」今こそ精神の再生を」というテーマで、産業界のバレイ・シーコードさんとクレア・クーバーさん

代表の方が話されました。住友さんも英語でスピーチされ大変好評でした。次のような内容でした。

「海部首相がシンガポール訪問で過去の日本の侵略に對し謝罪をされたが、日本は過去の反省の上に、環太平洋の一員として民族・宗教の異なった又貧富の差のある国々が人間の尊厳に於いては皆同じという基盤の上でお互いに融合し、今起こりつつあるヨーロッパ・ブロック、米州ブロックに對するアジアブロックを造るということではなく開かれたアジア、自由な世界、閉鎖されない世界を造る先頭に立つのが日本の役割ではないかと思われる。ブクマン博士(M・R・A運動の提唱者)の言葉の『貪慾を満たすものはない。しかし必要は必ず満たされる』という神の攝理が働くアジアの建設が日本の役割ではないかと思う」

各界各国の代表者から意見が発表され、貿易摩擦、南北の貧富の差の問題等、産業界が解決しなければならぬ問題を、和平追及から互いの思いやり貪慾の心を捨て、譲り合い人類全体

が救われるような大きい目標で運営されなければならぬ。その精神の確立は一人一人から始めなければならぬと、労使、先進工業国、さらに途上国の立場から話し合われました。

昼食は学生協経営のセルフサービスの食堂で取りました。又この食堂はM・R・Aでは大切な交流の場であります。

参加者の中に嬉しい顔を見つけました。それはニュージラランドからこられた、クレア・クーバーさんというご婦人でした。彼女は小田原のアジアセンターの開所された時から一年近く小田原におられた方です。二十八年ぶりの再会でした。マオリ族の舞踏団と共にこられた由です。彼女もくじけずにこの運動を三十年も続けておられたことに感動をおぼえました。

六月十六日(日)
「融和の流れを起すために」今こそ精神の再生を」というテーマで人と人の融和の結び付きについて話し合われました。牧師の未亡人の方が夫のガンとの闘いの中に、信仰により闘病の中から神を発見されたお話を

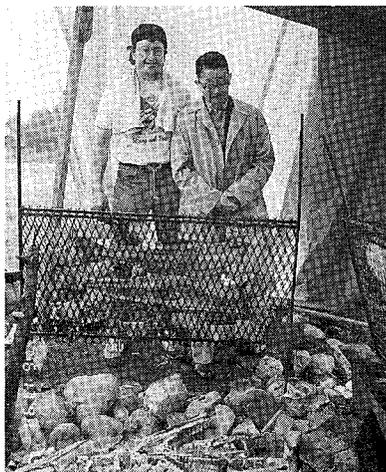
は感動的でした。そして日本で今ガンの告知の問題が騒がれておりますが、これは一つの解答を示しているのではないかと思いましたが、ガンを告知することが良いか悪いかではなく、する人される人の信仰の深さ、死生観の確立がどの程度かが問題だと思いました。

今日の通訳はバレイ・シーコードさんでした。よくわかる同時通訳でした。今日は住友さんはお帰りにいるのは私と韓国の元国会議員のチュン・ジュン先生の二人だけです。チュン先生は戦争中は日本からの独立運動に参加され、独立後野党議員として一期立た



インディアンの集會場で、韓国・中国・台湾・香港・インド・日本の方々

サーモンのバーベキュー
酋長の息子さんと筆者



酋長の息子さんが川から自分で取ってきた鮭をバーベキューにご馳走して頂きました。会場は木造りの大きな集合場でインディアンのおどりを見せる観光施設として利用

れ、以後M・R・Aの韓国の責任者として活躍しておられる方です。昭和四十年に鈴木市長を団長とする渡米団に韓国から学生十一名をつれて合流し、一ヶ月生活を共にされた方です。十数年前日本で国際会議が復活されてからたびたび訪日されておられます。そして後方の席にイヤホンをつけた五、六名の方がおります。この方は英仏語しか話せない方達のためです。仲々大変なことだと思えます。今後はバンクーバーの市内バスツアーと夜はカナダインディアンのスクアミッシュ・ネーション族のサーモン・バーベキューにご招待をうけました。

されているようですが、本来は各部族の酋長が集まり会議をしたり、結婚式場に使われるものだそうです。太鼓のお祈りでインディアンの生活信仰等について話して頂き楽しい一夜をすごさせて頂きました。(続)

資料

小田原町各種組合(二)

- ◎呉服商組合(十一軒)
組長 石井 定吉
副組長 鈴木愛三郎
- ◎時計商組合(十一軒)
組長 富沢 元平
副組長 小塩 治雄
- ◎布團商組合(五軒)
組長 堀江 幾造
副組長 石井富士松

- ◎魚商組合(九十五軒)
組長 日比谷興入
副組長 神保 良造
- ◎砂糖商組合(六軒)
組長 須山巳代造
副組長 込山 傳造
- ◎洋服商組合(十一軒)
組長 飛鳥井峯吉
副組長 山本松太郎
- ◎単筒商組合(十四軒)
組長 平田 勝治
副組長 本多 正八
- ◎玩具商組合(六軒)
組長 高松 時蔵
副組長 勝保宇三郎
- ◎金物商組合(十九軒)
組長 小林仙太郎
副組長 小澤 兵造
- ◎湯屋組合
組長 清水 専吉
副組長 欠
- ◎氷水組合(七軒)
組長 近藤重兵衛
副組長 欠
- ◎青物商組合(九十四軒)
組長 柳岡米次郎
副組長 狩野隆松太郎
- ◎大工組合(二百七十七軒)
組長 谷口勝次郎
副組長 松村 俊次
外 役員二十名
常設員 十名
幹事 六名
△月一回(廿五日例会
春秋二回大会)
- ◎銅鉄工組合(五十軒)
組長 青木 熊吉
- ◎在郷人分会
會長 小峯 徳次
副會長 北沢 登造
- ◎萬組合(百三十名)
小頭 大野久次郎
欠 神保 幸蔵
- ◎理髪業組合(四十五軒)
組長 中島孝次郎
副組長 岡田 忠吉
- ◎料理業組合(六十七軒)
組長 渡辺 市松
副組長 欠
- ◎藝妓組合(五十七軒)
組長 遠藤 太郎
副組長 欠
- ◎漁業組合
組長 長谷川平太郎
理事 組長共三名
幹事 二名
年一回集會す。
- ◎2古新宿組合(二百七十七名)
組長 湯川岩太郎
理事 二名
總代 四名
幹事 一名
年二、三回總代会及び臨時總會をひらく
- ◎消防(七七〇名)
組長 小峯 徳次
副組長 高久 幸正
小頭 村野虎五郎
二十四名

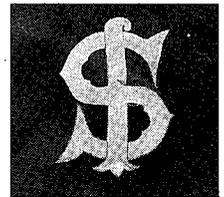
資料は大正の末から昭和の初めにかけてのものと推定される。

自修学校の創立者

大井龍跳

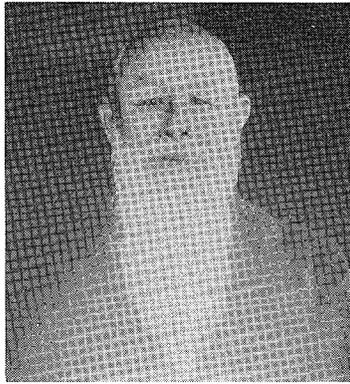
青年の教育に生涯を捧げた人

西山 銈太郎



一、生い立ち

自修学校創立者大井龍跳は、明治十年(一八七七)足柄上郡上曾我村(小田原市上曾我)瑞雲寺に生れ、駒沢大学の前身曹洞宗高等学校に学んだ。生来細心緻密だが豪放磊落の性格を合わせ持っていたので、檀家では東京の学校なんて卒業させてしまっは、田舎の片隅の寺に居るのがいやだ等と云い出されては困ると云うので、卒業させずに連れ帰ってしまっは。事実自分では病院でも経営したいとの希



ありし日の大井龍跳が、同三十七年七月二十九日退職した。この間小学生の希望者には、課業済後英語等を教えた。太平洋戦争の末期に、海軍中将で戦死した佐藤

望があつたようだ。現在、千葉県の寺に住職の傍ら医師として病院につとめてる人があるが、当時としては寺の住職が病院の経営等出来たか否かは別として、広く社会へ貢献の出来る事業をとの考えがあつた。帰郷後は昼夜を問わず希望者に漢文等を教えた。筆者の父は明治十五年生れだが、沢山な漢文の書物を持つてて、おっさん(筆者の家は瑞雲寺の檀家だから)に習つたと云つていた。

大井龍跳は、明治三十四年(一九〇一)八月二十四日から曾我小学校に教員として勤務したが、同三十七年七月二十九日退職した。この間小学生の希望者には、課業済後英語等を教えた。太平洋戦争の末期に、海軍中将で戦死した佐藤

源蔵氏等も、この中の一人であつた。小学校退職は、将来に大目的を持つての事と思われれる。小学校退職後は益々教えを請う者が多く、庫裡は寺小屋・塾を彷彿させ、自修学舎と名付けられ、明治四十年四月には自修学会と改称した。当時足柄平野に於て中等学校は、明治三十四年四月県立小田原中学校、明治四十年四月吉田島村に二カ年制の農業補習学校が設立され、明治四十二年三年制となつた足柄上郡立乙種吉田島農林学校があつた位のものであつた。当時の一般庶民の家庭では労力的にも経済的にも、五年制中学校へ行ける状態の者は少なかった。また、余り勉強をさせてしまつて家の農業がいやだ等と云われては困ると思われれた。昭和三年でさえ、尋常小学校卒業者男子数六六万二二七人、うち中学校進

二、自修学校創立

学数は六万一九三〇人で一割にも満たなかつた。大井龍跳は予てより教育の必要を痛感してたが、将来有為の青年で進学出来ない者の多い事を嘆き、自ら校長となつて、明治四十三年七月六日自修学校を創立せしめた。そして今日もなお、新鮮さを失わないJとSを組合わせた校章が制定され、女子の学校の少ない当時、女子にも門戸を開放した。明治四十四年三月には、自修学会時代から引続きの第一回卒業生十一名が巣立つて行つた。

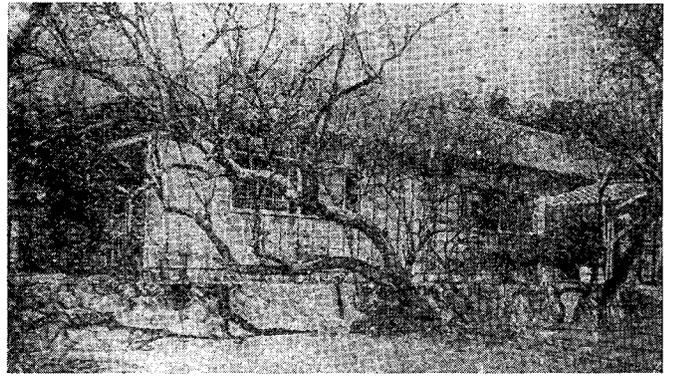
この中の一人下沢英俊氏は、自修学会から自修学校と名前は変つたが、内容は何等変わる処はなかつたと証言した。自修学会時代は既に立派な学校に成長してたと考えられる。この下沢氏は、当時東京芝の、その名からしてそれと分る海軍兵学校志望者がワンサと押し寄せた名門、海城中学校第四学年の編入試験に挑戦して美事合格し、のち仙台の高等工業学校へと進んだ。貴族院議員伊沢修二氏は日本音楽教育の先達で、文

部省の教科書編集局長・東京高等師範学校校長等歴任した。自修学校に通学していた酒匂の別荘管理人の子供が、誠に折目正しい青年なのに感じた氏は、一日、創立日浅い自修学校を視察して、その教育内容が充実し、その教育態度の真摯なる様にいたく感激して、その視察記事を当時博文館発行の『農業世界』明治四十四年五月号に発表した。

「……この村に大井龍跳と云う僧侶がある。年齢は三十余歳ならんが自修学校と云うものを設けて該地方の青年に向つて中学校程度より稍々低度の補習教育をやっているが、その教育は極めて真面目で、道徳堅固であるから、この自修学校が出来てから、その感化を受けて、該地方の風俗は一変して善くなつたと称せられてゐる」と。

これ程の実力を有した自修学会が、何故もっと早く学校として認可されなかつたのか?

前記の如く、吉田島農林学校は乙種の三年制で郡立だった。三年制でも実業学校の普通学科の程度は至つて低い。当時の五年制の男



最初の校舎(瑞雲寺境内) 大正2年2月11日落成式

子中等学校について見るに、外国語教育を義務づけたのは中学校であり、実業学校では商業学校が実施していたが、工業学校・農業学校は外国語教育は義務づけられてなかった。

当時の足柄上郡長は、神奈川県警部から明治四十年十二月十日転じ、明治四十五年五月三十一日迄在任した菊池芳二氏であった。菊池郡長は自分の在任中に、農業補習学校から三年制の乙種農学校にしたのに、私立の各種学校の二年制で、

はるかに普通学科の程度の高い学校の出来の事は好ましくなかった。その為学校の形態はとくに備わりながらも中なか認可が得られず、やっ

に就て見るに、生存中の歴史

代戸長・村長及び後に県会議員・郡会議員、または村長・村会議員になった人々であり、現職の市川村長は明治四十一年十一月六日より大正元年十一月十五日の間在任した。曾我村関係に於いても同様の人々と考えられる。従って賛助員の委嘱は学校認可申請を企図した頃と考えられる。

大井龍跳は生徒父兄の経済力・労働力を考慮し、一人でも多くの青年に勉学の機会を得させようと、授業は一年中午前八時から十二時迄とし、午後は各々自

宅に於いて家業の手伝いが出来る様にした。授業料は第十七回生たる筆者のときでさえ授業料校費共で一ヶ月一円五十銭だった。大正十三年一月発行の『足柄上郡誌』によれば、「大正二年には始めて三教室・事務所の平家六十二坪の校舎が、瑞雲寺西側梅林の中に完成二月十一日落成式が行われた。そして此の日を学校記念日と定めた。この校舎の建設には曹洞宗永平寺・総持寺の両大本山を始めとし、曾我村等から補助金が給され、地元上曾我青年団並びに学校生徒等は勤勞奉仕を行った」と記されている。

三、苦難の経営

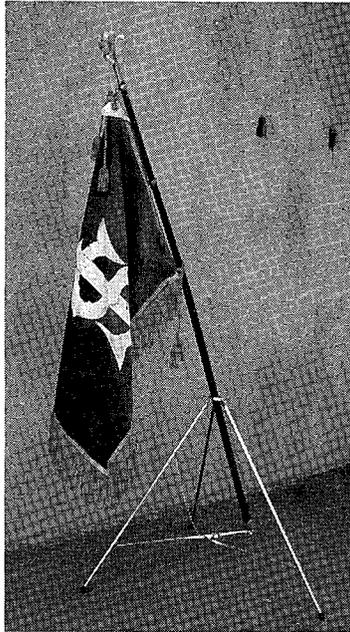
しかし学校の経営には困難が多かった。せめて県から五百円の補助金を欲しいと思つてたが思ふ様にはいかない。丁度近所から出ている県議員が大井龍跳は五百円の補助金を欲しいと何回も訴えた。五百円出なければせめて三百円でもよいから口をきいて欲しいとの願いも空しく、遂に働いて呉れなかった。生徒の中には「県議員は儀式の時

には袴をはいて上座へ座つてゐるが、何にも働かないと云う者もあった」と酒匂在住の第八回生讓原義守氏は証言する。ここに於いて大井龍跳は、各種学校でも生徒に実力をつけ、実力ある人材を養成して社会へ送り出し、真価を認めて貰おうと決心をした。生徒には常々実力ある人間になつて欲しい。その為よく勉強してくれと頼むように話をした。週間二十四時間だが、修身・国語・漢文・数学・英語・和英習字・算盤等について、中学校三・四年程度の教育がなされた。成績優秀な生徒には、授業料免除の優遇制度があった。

讓原氏はなおも証言する。

「英語は時に週二時間位延長する事が月二回はあった。英語の宿題がない日はなかった。その為学校往復に各一時間を要したので、常に勉強しながら歩いた。生徒は足柄上・下に別けて対立競争をさせられた。平均点九十六点以上は特待生にするといわれ、私は九十八点以上とって特待生になつた。

修学旅行は日光で神橋館



自修学校校旗

学校の経営は種々困難・苦労は多かったが、ともかく一応軌道にのったかに見えた。

四、大震災

「君が一番うまい、又文法も正しいと云った」と。
自修学校では自校の卒業生をしばしば教員に採用した。譲原氏の証言で尤もだと納得した。

学校経営の目標は五年生中学校への昇格にあった。大井龍跳は常々生徒に対して「明治時代は小学校でよかった。大正時代は中学校

五、東方台上へ移転

が、大正十二年九月一日、突如として起こった関東大震災は学校を、更には寺の本堂・庫裡をも一瞬にして壊滅せしめた。剩すその長男十五歳、五女六歳、次男四歳の三人の愛児をも同時に奪われた。生徒の取扱態度からそれと知れる人一倍子煩悩だった大井龍跳の嘆きは如何ばかりだったか。しかしながら剛毅な彼は一切の悲しみと苦しみを乗り越えて、直ちに学校を復旧し、瑞雲寺は昭和二年三月、以前にも増して豪壮なる本堂を完成せしめたのである。

が、大正十二年九月一日、突如として起こった関東大震災は学校を、更には寺の本堂・庫裡をも一瞬にして壊滅せしめた。剩すその長男十五歳、五女六歳、次男四歳の三人の愛児をも同時に奪われた。生徒の取扱態度からそれと知れる人一倍子煩悩だった大井龍跳の嘆きは如何ばかりだったか。しかしながら剛毅な彼は一切の悲しみと苦しみを乗り越えて、直ちに学校を復旧し、瑞雲寺は昭和二年三月、以前にも増して豪壮なる本堂を完成せしめたのである。

学校経営の目標は五年生中学校への昇格にあった。大井龍跳は常々生徒に対して「明治時代は小学校でよかった。大正時代は中学校へ行くのがあたりまえになって来た。だが、君達見ていたまえ。やがて高等学校へ行く事が必ず普通になってしまふから」と語りかけていた。

大井龍跳は直ちに関係方面へ挨拶状を発送し、当時赤坂の近衛歩兵第三聯隊に応召勤務中の筆者宛にも送達された。そして「第一回入学考査は三月十六日〜二十日迄の三日間に亘り実施

大井龍跳は直ちに関係方面へ挨拶状を発送し、当時赤坂の近衛歩兵第三聯隊に応召勤務中の筆者宛にも送達された。そして「第一回入学考査は三月十六日〜二十日迄の三日間に亘り実施

大井龍跳は直ちに関係方面へ挨拶状を発送し、当時赤坂の近衛歩兵第三聯隊に応召勤務中の筆者宛にも送達された。そして「第一回入学考査は三月十六日〜二十日迄の三日間に亘り実施

大井龍跳は直ちに関係方面へ挨拶状を発送し、当時赤坂の近衛歩兵第三聯隊に応召勤務中の筆者宛にも送達された。そして「第一回入学考査は三月十六日〜二十日迄の三日間に亘り実施

大井龍跳は直ちに関係方面へ挨拶状を発送し、当時赤坂の近衛歩兵第三聯隊に応召勤務中の筆者宛にも送達された。そして「第一回入学考査は三月十六日〜二十日迄の三日間に亘り実施

大井龍跳は直ちに関係方面へ挨拶状を発送し、当時赤坂の近衛歩兵第三聯隊に応召勤務中の筆者宛にも送達された。そして「第一回入学考査は三月十六日〜二十日迄の三日間に亘り実施

大井龍跳は直ちに関係方面へ挨拶状を発送し、当時赤坂の近衛歩兵第三聯隊に応召勤務中の筆者宛にも送達された。そして「第一回入学考査は三月十六日〜二十日迄の三日間に亘り実施

昭和三十二年四月入学の第三十二回生は、昭和十七年三月自修学校最後の卒業生となり明治四十三年七月六日創立翌四十四年三月十一名の卒業生を出した自修学校を、前年四月一日発足した湘北中学校に引継いだ。

湘北中学校は昭和二十三年戦後の学制改革に依り、新制中学校を併設せる湘北高等学校を発足せしめた。湘北高・中学校は、後、向上高等学校と改称、伊勢原市に移転、隆々と発展するに至った。

六、戦時中の苦心
筆者は前記の如く昭和十五年六月臨時召集令状に依り応召入隊、最初一年九ヶ月は内地・後外地勤務で、昭和二十二年二月未帰還し、五年振りで湘北中学校となった母校へ帰還の挨拶に訪れた。大井龍跳は壮年の頃重い病気で髪やひげは悉く白くなってしまうが、ここ数年間にその白いかみもひげも微笑のたえなかつた唇もすっかりやつれて、声さえも満足にたたなかつた。筆者の隣家で湘北中学校第一回生屋野孝一氏は語った。

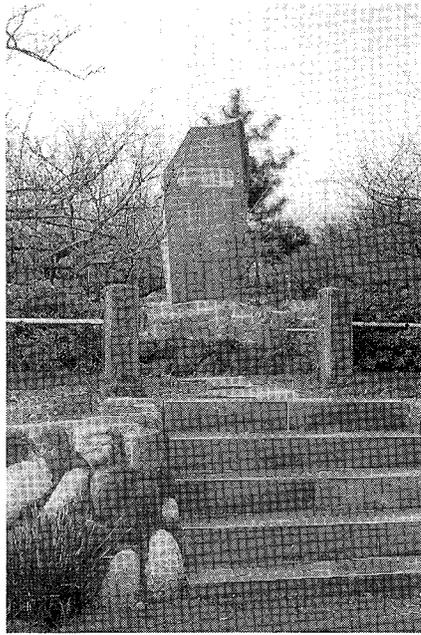
「戦争も漸く苛烈になって来てからは、生徒は軍需工場への勤労動員で勉強どころではなく、生徒から見れば学校の苦勞の細かい点ば分らないが、大井校長先生も満員の汽車にもまれて生徒の動員先へ行つての激励や精神訓話等、一通りの苦勞ではなかつたようだ」と。

これ等の戦中戦後の精神的肉体的苦勞が一時に出たのか、大井龍跳は高等学校発足の直後、昭和二十三年七月三日、その苦難と波乱に満ちた生涯を閉じた。時に七十一歳だった。

大井龍跳の死は学校並びに瑞雲寺関係者からは大変に惜しまれた。瑞雲寺では既に第十九世住職に中興の称号が贈られてたが、特に「当山二十一世重中興龍跳昇天和尚」の法号が贈られた。

七、青年の教育に
一生を捧ぐ

昭和四〜五年頃か上曾我の竺土寺で結成の行が行われた。俗人はこれを江湖と云い、本来は百日の行であるが、当時は五十日を以て代行された。住職は一生の



「自修学校発祥の地」記念碑

中一度は必ずこの儀式を行って、はれて緋の衣を着、大和尚の称号を得るのが通例だった。然し五十日もの期間では、費用も労力も檀家としては仲々大変な事だった。当時はテレビは勿論なく、ラジオは大正十四年に放送を始めたがその普及率は、昭和二年三・二%で二割を越えた程度だった。民間放送は勿論なく、田舎には娯楽らしいものはない。一寸珍しいものがあると近隣から押し寄せた。結成で行われる法話や修業僧の問答等、門外漢の我々が聞いても面白くもあり、又大変有益でもあった。

竺土寺へ何回か見に行った筆者は祖父に、瑞雲寺では江湖はすでに終わったのか

或いはまたなのかを尋ねた。祖父は「おっさんは自修学校で檀家の者に大変苦勞をかけ、本堂の屋根替(大正五年茅葺だったのを瓦屋根に改造)で負担をかけ、又大震災で本堂が倒壊して再建する等があるので、遠慮してやられないのだ」と云っていた。

人は誰でもそれぞれの社会に於いて、人の右に座ろうとの欲はあるものだが、大井龍跳は常に左方・下座に甘んじ、佛教界に於ける自分の地位や名譽一切を犠牲にして、青年教育に一生を捧げたのであった。

八、遺徳を偲んで

昭和二十五年、自修四十年、大井校長三回忌を迎

え、学校関係者はその徳を慕って顕彰銘が建立された。碑の正面上部横に「建碑銘」その下に縦書きに

湖北高等学校長大井龍跳先生逝いて早くも三回忌を迎え温容校風追慕の情転切々たるを覚ゆる瑞雲寺住職として信を一身に聚むるも直なるかな弱冠にして学舎を寺隅に興してより自修学校を経て自修学園の今日に到るまで風を望み薫化の恵に浴するもの七千に及ぶ自修創立四十周年を記念し学園卒業生等議りここに先生の墓碑を建立し遺徳を偲ぶ

昭和二十五年十月十四日

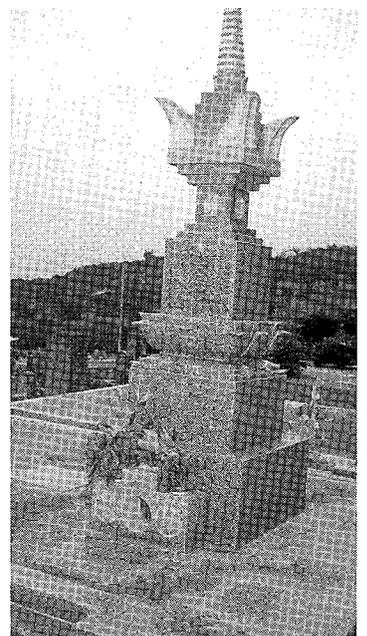
自修学園湖北高等学校校長 田代信次識

と書かれてる。簡にして要を得た名文である。氏の逝去をいたみ師を慕う気持をよく伝えている。裏面に

昭和二十五年七月十四日

自修学校卒業生
自修学園卒業生 建立
教職員生徒

とある。
昭和五十五年は自修学校



大井龍跳の墓

創立七十周年にあたり、又大井龍跳の三十三回忌でもあった。かつてここに学んだ人々相謀り「自修学校発祥の地」碑建設を計画した。幸にして四百四十四名の賛同者と三百余万円の資金を得た。碑の題字は第一回卒業生にとの希望は、たった一人の生存者下沢英俊氏を得られて何よりの幸だった。学校歴史は元教諭大井諦玄氏の揮毫に依り、昭和五十六年二月十一日学校記念日、第一回校舍玄閣跡前付近に建設された碑の前、春に魁ける梅林の中で除幕式が行われた。此の間向上高校特

は縦書きに次の様に書かれてる。

自修学校は明治四十三年七月校長大井龍跳先生に依つて此の地に創立され大正十五年瑞雲寺東方台上に移り後湖北中学校湖北高等学校向上高等学校と改名発展した本校に学んだ多くの青年は質実で剛健且つ積極性に富み夫々の職場に或いは郷土に於ける中心人物となり常に発展の先駆者となった此の度創立七十周年を記念して母校発祥の地を後世に伝うべく此の碑を建てた

昭和五十六年二月十一日

自修学校在学者有志一同

幸であった。
碑の高さは三・五米、その上部に校章、次横に「自修学校発祥の地」学校沿革

当日は向上高等学校から 学校長・副校長・生徒代表の参列を得、大井校長の遺族、自修学校旧職員、第一

回卒業生下沢英俊氏以下二百余名列席の下に盛大に行われた。粗酒粗肴ながら何れも幾年月振りの再会で話が弾んだ。祝宴中突然参加者の中から「来年以降毎年、今日の様に簡単でよいから

懇談の機会を作る様にせよ」との要望が出て「そうだろうだ」の声が各方面から聞えた。一杯のんだ後の事でどんな事になるかと懸念されつつも、次の年「自修学校々友会」を復活せしめた。

昭和五十七年二月十一日、自修学校々友会復活はなり、参会者一〇〇名、以後毎年二月十一日総会を行つてゐる。会員は最後の卒業生でも六十歳台半となり、残念ながら毎年若干名の鬼籍に入る

者がありながらも、新たなる会員を得て、出席者は毎年八十名前後に定着した。校友会旗(校旗と同じJとSを組合せた図案)を先頭に坂道を、足の弱い者を労わりつつ、大井校長の墓に

詣でて後、かつて勉学にいそしんだ青年の頃に返り、当時のニキビ面を思い出し、いたづらをした事、大井校長の態度の真剣さ、慈愛にみちた白いかみ、白い長いひげとその抱擁力を語りつつ、粗酒粗肴で気炎をあげ、終戦後占領地で米英軍の接収部隊に接し、学校に学んだ事の好運は何時も話題に上つてゐる。

丹沢の植物

⑨ 城川四郎

山野に生える蔓植物でハート型の葉を向かいあつて着け、植物体に少しでも傷をつけるとたくさんの乳のような白汁をだすものがある。何れもガガイモ科の植物で神奈川県にはそれに該当するものが3種類分布している。暖帯(ヤブツバキやタブが生える)にはガガイモ、コイケマがあり温帯(ブナやミズナラが生える)にはイケマが生える。それらのうち最も普通なのはガガイモで、コイケマは比較的珍しい。丹沢や箱根の上部にはイケマが生えているが平地では見られないから山登りしない人は接する機会がない。箱根には分布個体数が少ないようでもとまって生えているのに出合ったこ

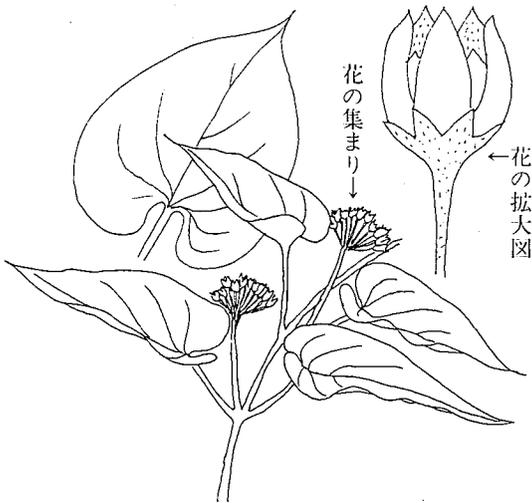
とがない。丹沢には群落状の場所もあり、たくさん見ることが出来る。イケマとは妙な名前だがアイヌ語で「神の足」を意味するといふ。さて、丹沢に分布するイケマを調べているうちに花卉の開き方が文献に記載のように反転しないことに気がついたのはもう三十年も前のことであつた。近年機会を得て全国のイケマの標本を調べてみると丹沢型のイケマは富士山を中心と

する限られた地域にだけ分布することがわかつた。フォッサ・マグマ地域に分化したイケマの変種と考えられる。その分布域内には母種のイケマは分布していない。この丹沢型のイケマは丹沢だけに分布するものではないが丹沢で初めて母種との違いに気がついた植物なのでタンザワイケマと命名した。

まだ発表して間もないので植物に詳しい人でもこの名前はまだ聞いたことがないに違いない。夏の暑い時期に白い小さな花が図のようにたくさん集まって咲く。しかしその傍らを歩くほとんどの登山者たちはあまり美しいとはいえないこの花に眼をとめることもない。

明治末年から大正・昭和に入って戦前迄の純農村地帯にあつて、推定五千余の青年が、英語を読みかつ書き、更には代数・幾何を解く事が出来たのは、最も好運だつたと云うべきである。自修学校が神奈川県西部地区に於いて、教育・文化、特に道義の高揚に貢献した功績は絶大である。大井龍跳の偉業は大きく称えられ、永く後世に伝えられる事であらう。

タンザワイケマ (ががいも科)
Cynanchum caudatum (Mig.) Maxim.
var. *tanzawamontanum* Kigawa



筆者原図

参考書

- 『農業世界』『足柄上郡誌』
- 『曾我の里』『下曾我田島郷土史』『校友会員名簿』小田原史談『曾我小学校開校百年史』『張作霖爆殺』

島蘇里江 (四)

翠子の場合

文と絵

隠岐威重



中国妻に

張家の老主人の秘密結社の在俚の義兄弟で南の河上の東安鎮に住む徐という人がおりました。日本人の友人もおり、東安鎮では珍しく自転車を持つ裕福な人で、息子さんは佳木斯で時計屋を開いているそうです。私をその時計屋の嫁にと、義兄弟同士で決めたようです。でも、その息子さんには水商売上がりの奥さんがおり、いつでも離婚すると申しますが、私は気が進みません。冬の寒い日、父親が種で東安鎮から私を迎えにまいると申します。もう逃げる道はございません。でも、その結婚はいやでした。追われる私は、日頃から口をきいていた満州国軍の兵士だった王さんの所に駆け込みました。

王家は姉と兄弟三人が一

緒に住んでおり、つましく暮らしておりました。その末弟の嫁として、追い詰められた私を心温かく迎えてくれました。

あんなに中国人との結婚を拒んでいた私ですが、追い詰められ、遂に第二の人生を始めました。

この海青で四年、後に佳木斯に移り、帰国するまで三十年間、この北の国で暮らすことになったのでございます。

その夫との間に生まれた三人の娘の出産育児、私の就職、文化大革命、一回目の帰国の失敗、そして三十年後の二回目の帰国でやっと内地に戻ったのでございます。

その後の私の生活は後に誌しますが、その前に、戦乱の臭いがくすぶる中に海青で会った二人の孤児のことを、どうしても記したい

のでございます。

ある日、撫遠の河原で二歳位の日本の男の子を拾った一膳飯屋の中年夫婦が、その子連れて海青の私の家にまいりました。

丁度その時、亮子里で劉さんと再婚して一児をもうけた香坂千鶴子さんも海青の私の家に見えておりました。

その子を一目見るなり、「この子は宇田さんの坊やです」と大きな声を上げました。

千鶴子さんは撫遠の宇田さんのお宅でこの子に会っていたのです。香坂さんの見立てには狂いはございません。

この子は目つき、口元が亡くなった宇田さんにそっくりだそうです。

何故かこの子が、私と香坂さんになついて離れませんが、私達二人も、たった一

人の日本人の忘れ形見がこの上なくいとおしく、遠い異境で日本に帰る希望も失って、この地の果てで消えて失うかと思ひ、我が身に照らして幼児を堅く抱き締めました。

帰国後この子の親探しに骨を折り晴れて富山の伯母さんに引き取られ、今は立派な日本人として生活しております。

もう一人の子は、やはり夫の同僚の北山警尉の子供であることは、公安局の帳簿にはつきり記されているのですが、開放後、特に文化大革命の期間中は、日本人であるということ迫害されました。周囲の住民は皆知っているのですが、本人は頑固にそれを否定しており、長野県北山さんのお兄さんも、本人がそう云うのなら、ということ、私達もそっとして今日にまで及びました。二人の孤児のこと、一人は内地に帰り、一人は彼の地に残っております。

一人は自分の望み通りに帰国、内地で幸せな生活を送っています。もう一人の子、文化革命

と云う大きな壁に遮られたとはいえ、本人の気持の内側を考えますと、何か曲折したものを感じざるを得ません。どちらが幸福かと申すことは別として夫の王は氣短で心に思うことをかくしておけない性質で、日本人に似たところがあります。変転の目まぐるしい中国で、生きて行くには向かぬ性質が後になって分かってまいりました。それでも、ウスリー下流の海青での生活は王兄姉に支えられて、貧しい生活でしたが、遠い孤独の旅愁を慰めてくれるものでございました。

とはいえ、海青の生活は貧し過ぎて子供の教育を考えるゆとりもございませんでした。海青に四年、私は無理に夫の王を口説いて佳木斯に出ました。海青の穴蔵のような生活に比べますと、佳木斯は光り輝く街でございました。内地に何だか近くなったように思えました。その頃(昭和二十四・五年)の中国は大らかで住居往來の自由もございました。

光り輝く街と申しますのは、電灯が点って明るい外に、我々庶民にとっては、

紅蓮洞・坂本易徳 ⑦

岡部 忠夫

坂本易徳は、慶応義塾で福沢桃介と同期に学んだこと(『日本近代文学大辞典』)は、最初の稿でとりあげたが、念のためこのことを、慶応義塾大学文学部宛に照会してみた。

文学部宛としたのは、易徳が明治二十三年(一八九〇)に文学科に入学したと、『函東会報告誌』に載っているからである。

本会編集委員坂本易徳氏は明治二十一年七月慶応義塾に於いて正科優等卒業せられ爾來學術研究才能養成の為在京せられしが、今般同塾新設の大学部文学科へ入学せられたり

義塾からなんの回答がないので諦めていたところ、何か月かして、同学三田情報センター貴重書室「三田文学ライブラリー」担当の田中正之さんからの便りに接した。それは、義塾文学部宛照会に対する返答で、

私の不躰な質問に対して、懇切な回答や、いろいろな資料を寄せていただいた。

返事を頂くまで間があったのも、その間いろいろ調べ下さっていたのである。

以下、田中さんの回答や資料に基づいて、坂本易徳の義塾での足跡を追ってみよう。

『慶応義塾入社帳』によると、易徳は、明治十九年(一八八六)入社している。彼が廿歳頃のことになる。大学部に入社したのは、同二十三年一月で、満二十三歳のときである。年齢的にはちょっと遅れている。

余談だが、ここでちょっと気がつくのは、入社と入学と同じ意味に用いていることで、ちょっと意外な感じがする。

現在、入社といえば、会社に就職して社員となることである。ところが、明治初年には会社という言葉は、もっと

広い意味を持っていて「同じ志で物事を行なう集団。同人の会。仲間。結社」(『日本国語大辞典』)と、その対象には広がりがあった。

それが物を生産するとか、サービスを提供する会社に限って用いられるようになったのは、いつ頃であらうか? 会社勤めの人が多くなった頃と、漠然とした形で受けとめられるにしても、それは明治の後期、それとも大正に入ってからか、となるとはっきりしない。

ともあれ、広義の会社という言葉を福沢諭吉はいち早く用いている。彼は、慶応四年(明治元年一八六九)四月、「慶応義塾の記(岩波文庫『福沢諭吉教育論集』)に次のように記している。

今ここに会社を立てて義塾を創め、同志諸子、相ともに講究切磋し、もつて洋学に従事するや、事も私におおらず、広くこれを世に公にし、士民を問わずいやくも志あるもの来学せしめんを欲するなり。(以下省略)

ところで、当時慶応義塾

の入学資格は、小学校に該当する幼年塾の幼稚園は別として、それ以外は、特に

学歴・年齢の制約がなく、すべての若者を対象としており、必ずしも中等学校を卒業していなくても、入学は認められていた。坂本易徳が明治十三、四年頃(一八七〇)五郡共立の公立小田原中学校(旧県立小田原中学校ではない)に入学後、中途で(明治十六年頃か)上京していることは前にも記したが、明治十九年(一八八六)、慶応義塾正科に入学する迄の三、四年間空白があるがはっきりしない。

坂本は、慶応義塾正科に入学してから、ちょっとした話題を提供している。

そのことが、別冊『太陽』「慶応義塾百人」(平凡社発行、昭和五十五年三月)に載っている。勿論、田中正之さんが提供してくれたものである。

それは、福沢諭吉を終生補佐して義塾の経営に任じ社中で尊信を集めた、小幡篤次郎の「きびしい一面には、酸いも甘いも知った寛厳よろしきを得た教育者」としての人柄を語るため、

坂本がその引合いに出されたのである。

その頃、小幡は義塾の塾長の職を勤めていた。ついながら記すと小幡が福沢の後を継いで、社頭となるのは、福沢が没した明治三十四年(一八九二)二月以後のことである。

それでは、以下、坂本に係わりのある部分だけを引用する

坂元紅蓮洞という明治大正のころに文名があった一種の人物がいたが、明治十九(一八八六)年にノルマントン号事件のあったとき、坂元らが義捐金募集のために催しを企画し、ノルマントン号の船長ドレイクの裁判を素人芝居に仕組んで上演しようとしたところ、小幡がこれを聞いて、先日東京大学の学生が英語芝居をやった、世間の物議を醸したばかりのときであるから、学生芝居はよしではどうかと注意した。坂元らは自分たちは芝居をやりたいたのではなくて、目先きの変わった余興をやった学生を集めたいだけだといったところ、小幡は、



助けを求める日本人たちに向って英国船員曰く

「助けてもらいたいなら、何ドル出すか？ 早く言え。時は金なり」

それなら福沢先生に話してお嬢さん方や私の娘などの舞踏を出してはどうかといった。学生たちは大喜びで、自分たちの会合に先生方のお嬢さんが出て下さるといっているので、当日は大入満員になった。後れ馳せにやって来た人情噺の三遊亭円朝が、この

ノルマントン号事件

清水敷編著『ジュジュ・ビゴ』画集「明治を活写した仏人風刺画家伝」(美術同人社刊)より

れを見て頓狂な声を挙げて嬉しがり、茶碗と火箸とでチャンギリをたたいて三味線に合わせて興を添えたと、「小幡が」懐旧談を語ったことがある。

ノルマントン号事件とは、明治十九年(一八八六)十月二十四日、イギリス貨物船ノ

ルマントン号(一、三三ト)が、横浜から神戸に向う途中、紀州大島沖で暗礁に触れ、約一時間半後に沈没をし、その際、船長ジョン・ウィリアム・ドレーク以下二十六名の船員はボートで避難したが、日本人乗客二十三名は全員海中に消えた出来事である。国内世論は、船長のとった措置は極めて非人道的行為であると、大いに沸騰した。

等条約改正の交渉を外国公使と進めている時期にあったが、このような事態には放って置けず、兵庫県知事に命じて、横浜領事館にドレーク船長を殺人罪で告発させた。その結果、十二月八日、イギリス領事は、ドレークに対し有罪判決を下し、禁錮三カ月の刑に処したが、損害賠償は行われなかった。

学生が英語芝居で世間の物議を醸したとして、退けさせたのであろうか……。

それは、もとより小幡の見識によるものであり、また、福沢諭吉と同じ認識に立つものと思われる。

その点、ノルマントン号事件で、『時事新報』が張った論陣を見れば明らかである。

ところが、十一月一日、神戸のイギリス領事館で開かれた、領事を長とする海難審判は、六日、船長以下全員無罪の判決を下した。船長の言い分を全面的に認めた結果で、日本人船客に二度にわたってボートに乗り移るように命じたに拘わらず、日本人乗客は、それに応じなかった、言葉が通じなかった為である、という訳であった。

坂本易徳は、ときに二十歳、多感多情の青年期にあった。新聞論調に敏感に反応を示す年代でもある。彼は、このような事態には、ごっとしていられない質でもあった。しかし、彼のその美質が変じて、周囲に与える影響など頓着なく、一途につつまることがあり、後年一悶着を起こしている。このことは、後に譲るとして、彼がノルマントン号の学生芝居について、小幡篤次郎の指導に素直に従ったのも、小幡の人柄に服したためであり、また、坂本が生徒としての身分をわきまえていたからであろう。

『時事新報』は、明治十五年(一八八二)の創刊、発行社は慶応義塾出版社、中上川彦次郎が社主、中上川は福沢と同じ中津藩の出身、福沢の門下生でもある。編集・会計のスタッフは慶応義塾出身者。実際上の主宰者は福沢諭吉ということになる。

これに対し、世論は一層燃えさかり、排外的気運が漲った。また、時事、東京日々、朝野、毎日、報知の新聞五社は、連名で社告を掲げ、遭難日本人旅客遺族のため義捐金の募集を始めたのである。当時、政府は対外問題の懸案である不平

小幡は福沢と共に、折々『時事』が取り上げる題材の立案に当たっている。スタッフが書き上げた文章は、福沢がちよいちよい加筆している。小幡も同様なことをしたと思われる。いうなれば、小幡は福沢と同じ考えに立っていたとしても差支えない。

以下『時事』のノルマントン号事件についての論調と、坂本易徳とは直接関係

対外問題の懸案である不平

小幡篤次郎何故に、坂本らの学生芝居を、東京大学の

ないことではあるが、ちょっと触れてみたい。

『時事新報』は、事件の二日後の十一月三日、汽船の沈没から乗員収容までの経過詳細をいち早く伝え、四日付では、船長のとった措置を、「法律上、徳義上ともに決して許さざる所なり」と論評し、六日付には大島圭助の怒りの投書を掲載するなど、世論に訴え言論界をリードしている。

〔註〕大島圭助(一八三二—一九三二) 旧幕臣、明治の外交官

ところが、横浜領事館での刑事裁判でドレークが禁錮三カ月の有罪判決を下されると、『時事』は一転して、事件落着いた、「我輩はこれを見て満足せざるを得ざるなり」と、次のような意味の記事を掲げた。

多くの日本人が、今回の事件は殺人罪であるから、わが国の例からして、もっと厳しい罪を与えるべきで、三カ月の禁錮では罪が軽すぎると思うであろう。それは、日本人の考えとしては、一応もっともなことかも知れない。

しかし、今回の事件は、英国の法律でもって英国人を罰したもので、日本の法

律とは無関係であることを知らなくてはならない。

つまり、英国の法廷で、英国の法律をもって、英人の罪人を罰したもので、その処置は、公明正大で法律適用の正しいのは無論のこと、あえて疑いを容れるべきではない。

それゆえ、我輩はこの裁判に対して満足であると言ふ外はない。殊に満足したのは裁判の迅速な点である。もし、相手が支那であつたならば永遠に落着かないではないか。「これを思えば、英国領事裁判所」とき、さすがは文明国の法廷なり。実に文明の裁判、法に背かざるものなりと、そぞろに人をして感嘆、満足せしめざるを得ざるものなるべし」と、筆を描いている。

以上のうち、我輩というのは福沢であろう。あるいは他の者が執筆したとしても、重要な記事は彼が加筆している。『時事新報』の主張は、福沢の主張といふべきものである。

この福沢の不適切な論説は、世間の風潮とかげ離れていった点があつたようだ。勿論そのようなことに頓着するような彼ではなかった。

かつて戊辰戦争の折、上野の山で彰義隊と官軍が砲火を交え、江戸の八百八町が混乱しているさなか、福沢は、慶応義塾の塾生を相手に、英書のウエイランドの『経済学概論』の講義をしていたという有名な話がある。

ところで、このノルマントン号遭難事件を、後にある劇場で上演しようとしたことがあつたが、排外熱の再燃を憂慮した政府はこれを中止させたことがある。

勿論、福沢は政府の方針に同調した訳ではない。

福沢は明治六年(一八七二)、新思想の啓蒙を目的とした明六社の結成に参画するが、その機関誌『明六雑誌』が急進的な内容で、政府の政治的言論への弾圧強化の対象となり、メンバーの中に政府に妥協的態度が見られると、福沢はこれを退け断固反対した。ために『明六雑誌』は廃刊の止むなきに至った経緯がある。

福沢にしてみれば、ノルマントン号事件で、排外熱を煽るのは、進歩した西欧文物の導入に拒絶反応を示しかね、日本の文明富強への歩みを遅らせるものと

見ていたかも知れない。もっとも、これは私の手前勝手な推論だが！

ところで、坂本易徳と交友のあつた作家生方敏郎は、のちのちになつても青年が外国の事を論ずるときは悲憤慷慨し、明治学院のようなミッシェンスクールの寄宿舎の中でさえも、壮士芝居から生れた、次のようなノルマントンの歌が非常にはやされたと、『明治大正見聞史』で述べている。

もっとも、生方は坂本より十五、六も年下で、生方が明治学院に在学したのは、明治三十年代前半のことで、その頃も、ノルマントンの歌がうたわれていたとは、日本は、先進諸国に比較して、まだまだ弱く低い立場にあつたことを意味しよう。

夜半の嵐に夢醒めて：
噂に聞けば過ぐる年二十
四人の同胞は英国船と知りつつも旅路を急ぐ一ト筋に遂うかうかと乗せられて波路も荒き遠州の七十二灘も早過ぎて今は紀伊なる熊野灘

ノルマントン号事件で、坂本易徳が義捐善集といつた行動は、彼のアイディアに富んだ一面をも示すものである。

このことは、在京旧小田原藩士の子弟を中心に組織された「函東会」での、彼の活動にも、うかがえるが、このことは後廻しにして、彼が慶応義塾文学科入学に關連したことにについて触れたい。

坂本が新設の慶応義塾文学部に入學してから二、三カ月たつてのことである。文学部設置は明治二十三年(一八九〇)一月だから、春の季節だろう。彼は、偶然三田の通りで、北村透谷に出会った。

坂本は「やあ門ちゃんぢやないか」と話しかけると

「あ、キンペイちゃん！」と、透谷は、坂本易徳の幼名で呼んだ。

「君はどうしている」

「フレンド女学校の教員をしている。今その帰り路だ」「そうか僕はこここの文学科に入學している」
と話ははずんだ。(続)

郷土関係の刊行物 平成3年1月～6月

小田原図書館並びに3書店調査

- ◇小田原市史 史料編近代1
小田原市刊 A5 864P ¥5,000
- ◇御家中先祖並親類書 第2巻
文の会古文書グループ解説
小田原図書館刊 A5 310P 資料14P
- ◇一枚の古い写真
小田原近代史の光と影
小笠原清編著 小田原図書館刊
A4 322P ¥2,000
- ◇南足柄市史4 資料編 近代
南足柄市刊 A4 793P ¥5,000
- ◇松田氏関係文書集(南足柄市史別冊1)
A5 259P ¥2,000
- ◇小田原市郷土文化館研究報告 No.27
小田原市制50周年「小田原合戦400年」
記念号 小田原市郷土文化館刊
B5 126P ¥2,000 (別稿参照)
- ◇市史研究あしがら第3号 南足柄市
史編纂委員会編 南足柄市刊
A5 74P (別稿参照)
- ◇史談あしがら第29集
南足柄史談会機関誌 A5 104P
会員外¥1,700 (別稿参照)
- ◇足柄乃文化第20号 山北町地方史
研究会 B5 45P (別稿参照)
- ◇開成町史研究5号 開成町文化財
保護課編 開成町教育委員会刊
A5 105P (別稿参照)
- ◇箱根町立郷土資料館館報第7号
同館編集発行 B5 62P (別稿参照)
- ◇真鶴 第30号
真鶴町郷土を知る会機関誌
B5 69P (別稿参照)
- ◇小田原文化誌 小田原市文化団体
連絡協議会刊 B5 308P ¥2,000
- ◇小田原北条氏城郭顕正
神奈川古城研究会刊 B6 38P
- ◇NAUDEK 神奈川県立小田原
高等学校創立90周年記念誌
同90周年実行委員会 B5 194P
- ◇辻村植物公園の四季
小田原市刊18×17センチ ¥800
- ◇北条百歳 花の小田原第二巻
(小説) 塩見鮮一郎 批評社刊
- ◇草の巨人 二宮尊徳伝
和巻耿火著 毎日新聞社刊
B6 250P ¥1,600
- ◇続丹沢夜話 ハンス・シュトルテ著
有隣堂刊 B6 232P ¥1,900
- ◇箱根花紀行(写真集)
辻満芳雄 グラフィック社
A4変 78P ¥2,750
- ◇花ざんまい 東慶寺の花
花・井上竹 写真辻徹(南足柄市)
東慶寺刊 B4変 50P ¥5,000
- ◇こよろぎ同人句集 平成3年版
高田喜久三編 B6 14P
- ◇歌集 雲の曼陀羅 大木俊子著
四六判 196P
- ◇ロシアから来た黒船 大南勝彦著
静岡新聞社刊 A5 149P ¥1,500
- ◇夢枕漢著作 牙の紋章 祥伝社
四六判 382P ¥1,400
鬼譚 天山出版 四六判
378P ¥1,750
地球と遊ぶ(共著)朝日新聞社
四六判 237P ¥1,300
- ◇誇り高き人々 吉田木晴彦著
講談社刊四六判 209P ¥1,500
- ◇如是関文芸選集 岩波書店刊A5
III 310P ¥4,400
IV 338P ¥4,700
- ◇白秋全集 岩波書店刊 A5
II 730P ¥7,200
III 612P ¥6,200
- ◇詩を読む人のために 三好達治著
岩波文庫 284P ¥520
- ◇柳田国男 木村博編
城ヶ崎文化資料館刊
名著出版販売 B6 127P ¥1,500

郷土誌目録紹介

◇小田原市郷土文 No.27
化館研究報告 '91・3

戦国大名後条氏の評定衆につ
いて―その設定動向と職権
の存在を中心に―
實方 壽義

戦国期における相駿関係の推
移と西側国境問題
―相甲同盟成立まで―

山上宗二と小田原北条氏の茶
の湯―異風の茶の湯と宗二
の覚悟を追う― 内田 清

伊達藩鈴木家文書―北条氏直
子孫伝承家譜と川中島窪村
氏文書 山口 貢

小田原の北条氏文書 山口 博
小田原城二の丸中掘の石積み

◇市史研究あしがら 第三号
大雄山最乗寺の輪住制につ
いての覚書 岩崎 宗純

南足柄地域の地租改正
―関本自治会所蔵資料を
中心として― 松田 肇司

竹松の報徳堀―嘉永元年の三
町田報徳堀開発を中心に―

遺構について 大島 慎一
小田原城とその城下出土のか
わらけについて 山口 剛志

南足柄市の道祖神のまつり
生沼 精治

◇史料紹介
天保八年三月 二宮尊徳によ
る救急仕法の実態
浮田 喜和
南足柄村誌(一) 榎田 卓士

◇足柄史談 第29集
'91・4

大雄山最乗寺と威徳神通道了

大薩埵 三沢 智証
関本村に起きた窃盗事件の顛
末(慶応二年) 本多 松造

足柄県……史 安藤 進
「御留川」だった狩川
生沼 清治

三竹山分教場Ⅱ設立と本校統
合Ⅱ 安藤 初麿
足柄・洵綾における古墳につ
いて 本多 秀雄
足柄峠の花と詩(秋) 箭子 清

庶民信仰 岩本 一作
昔の矢倉沢地区の風習 石村 豊

アイオン台風の思い出 加藤 元義

和田河原の地名のいわれ 渡辺 賢蔵

明治・大正・昭和十年頃までの話 鈴木庄太郎

矢倉沢・内山地区の史跡を尋ねて 杉山 友治

◇足柄乃文化 第20号 '91・2

岩崎先生のお作「灰」とのいささかのかかわりを

湯山 厚

「小説」湯山おれん寛書 岩崎 京子

大盗耳四郎のこと 藪田 義文

丹沢山塊の主峰檜洞丸 奥野 幸道

北条氏政・氏照 墓前祭

去る七月十一日(木)

は、北条氏政・氏照の命日に当り、北条遺蹟顕彰会(会長込山和勇氏)では、当日の午後三時三十分より、追善供養の墓前祭を行った。

この日、小田原市長を

◇開成町史研究 5号 '91・3

延喜式にみる相模国「高野牧」について 青木 貞男

ある在村医の蔵書 高田 稔

近世開成町域村の商人変遷 その一 瀬戸 崎雄

開成町のカワニナ生息実態調査報告及びカワニナについて 井上 義光

◇箱根町立 第7号 郷土資料館報 '91・3

歴史調査報告 (1)元箱根川井家文書(目録収録数一一二点)・(2)箱根松井家文書(同一九〇点)・(3)芦の湯市川家文書(同二七点、初出の明治十九年「芦乃湯村誌」を含む)

湯本地区民俗調査報告書 地区の概況・道路の開墾と近代交通・集落のようす・社会のくらし(自治会・ク

始め要職の方々が出席。当小田原史談会では、高田喜久三会長、曾我保夫、和田登、吉池清、岩本武、岡部忠夫の役員諸氏が参列した。込山会長は、挨拶の中で、今後とも小田原の歴史のページを飾るにふさわしい史蹟として守ってゆく所存である、と決意のほどを語った。

ミの組織など)・信仰・農業(稲作・畑作・ミカン・お茶)・箱根細工・年中行事・食事のようす・人生儀礼など

◇真 鶴 第30号 '91・4

「源頼朝船出の碑」建設について 桜井 光夫

三宅克己画伯 青木 路春

戊辰戦争と真鶴 川ノ邊昭治

特別寄稿 「真鶴特攻隊回想記」 真鶴の生活の中で 高橋 富一

九死に一生 佐藤 武

真鶴駐屯日誌 佐藤 武・岩本 忠

町史編さん裏話 湯本 満

ほら吹き爺さん炬燵放談 半田 浩一

わが家の歳時記 朝倉 愛子

「郷土を知る会」録音テープ 目録解題 桜井 武



『小田原市史』全十六巻のうち史料編四冊が既刊となっており注目される。

「近代Ⅱ藩領1」「近代Ⅲ藩領2」は、故内田哲夫氏を中心に

小田原市史刊行案内

編集が進められたもので、近世小田原藩領の庶民生活を知るための基本史料である。

「中世Ⅱ小田原北条1」は、戦国大名北条氏の関係史料

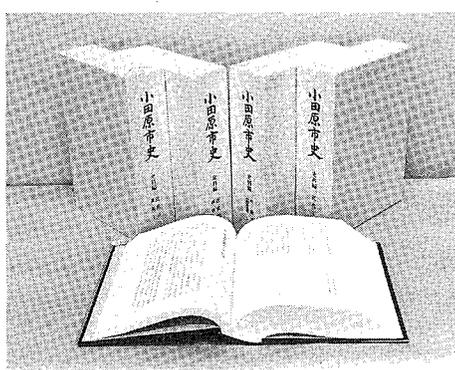
のうち、早雲氏康の三代までのもの約千点を収めている。永原慶一・岩崎宗純・佐藤博信の三氏が編集委員となっており、厳格な編さんが行われている。

「近代Ⅰ」は明治期の小田原の近代化に主眼を据え、公文書・私文書・新聞記事など多様な地方史料を駆使して編さんされている。編集委員は金原左門・宮坂博邦・森武麿の三氏である。

市民待望の市史であり、今後の刊行が期待される。

A5版・箱入上製・(100)1000頁・5,000円(中世Ⅱのみ6,000円)

※直接購入ご希望の方は小田原市史編さん係(33-1702)へお申し込み下さい。



会員計報

石井富作氏(荻窪三〇)昨年六月十五日逝去されました。享年七十五歳

越川金次郎氏(南町)一九二〇年四月十一日逝去さ

れました。享年八十七歳 江島平八氏(特別賛助会員・(株)江島社長)本年七月九日逝去されました。享年六十七歳

ご冥福をお祈りします。

会員だより

東京都西多摩郡

五日市町八二二

鈴木富美子

会報ありがとうございます。会費二千五百円振込みましたのでお願いいたします。

本号の中の隠岐威重氏(幼稚園前のお宅)福田綾子様(旧姓室田様)共に野崎繁様のおとなりの聖十字教会の花園幼稚園でお友達でございましたので、よく天神山のお家へ遊びに行きま

落穂集

した。お祖父様(義文様)はやさしいお方で、それはそれはよく遊んで下さいました。私のうちは「ういろう」の近所なので、小さい私は一人では行くことが出来ません。室田様よりお車のおむかえでうかがわせて頂きました。今、とつてもなつかしく思い出しました。

◎従来建物の新築現場でクレーン車が使用されるのは、鉄筋ないし鉄骨の高層建築に限られていました。近頃では、木造住

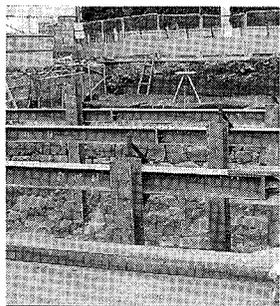
宅の建設に利用されるのが眼につくようになりました。それは、いつ頃から始まったのか、関心を持っていたところ、たまたま、注文住宅を手がける大工さんから話を聞くことが出来ました。クレーン車が木造住宅に用いられるようになったのは、十年前頃からだそうで、つい最近のことだと思っていたところ、そうではなかったのです。しかし、十年前頃は、クレーン車を利用して採算が合わないので普及しなかったようです。しきりに利用された始められたのは、四

年前、好景気になってからの由。去る八月二十七日、経済企画庁が発表した月例経済報告によりますと、八六年十一月に始まった景気拡大は、五十七カ月目に達し、戦後最長だった、「いざなぎ景気」と並びました。その景気も減速気味だといっているので、さる新聞社で、今回の好景気の呼び名のアンケートをとったところ、「平成景気」「バブル景気」とか「ひみこ景気」「昭和平成景気」等の回答があったとか。ともかく、これからの景気の

変動如何にかかわらず、今後、木造住宅建築にクレーン車が使用されることはいう迄もありませんが、その主な理由は、作業が楽に出来るということのようです。もっとも、クレーン車の操作は、住宅の組立手順をよく知った者でないと難しく、クレーン車運転の免許をとっただけの、かけ出しでは駄目だそうです。その点、組立順序をよく心得た篤職の人で、クレーン車の免許をとり操作する者がふえているとか。

特別賛助会員

- 智恵袋 相田酒造店
- 小田原銀座 アオキ画廊
- 足柄香粧株式会社
- 飛多屋
- 紳士服のアメリカヤ
- 画材 ガクブチ ヲウエ
- 伊勢治書店
- かまぼこ
- 株式会社 江島
- 税理士 小澤重治事務所
- 株式会社 小田原魚市場
- ◎小田原ガス
- 小田原信用金庫
- 小田原市農業協同組合
- 小田原報徳自動車
- 株式会社 オートセンター・スギヤマ
- 共小田原中央青果株式会社
- オリオン座
- かまぼこ籠
- 令学
- 鐘紡株式会社小田原工場
- 力本ボウ化粧品鴨宮工場
- 神尾食品工業株式会社
- かみやま小児科クリニック
- 興電社
- 小伊勢屋
- 宝飾専門店 Shimano JEWELRY
- 中華料理 昇玉
- 鈴木まほこ
- 辰寿堂スポーツ
- 大営不動産
- 割烹 おるほ
- ◎そびそ二宮
- 茶半家具株式会社
- ちんろう本店
- 角田ガクフ子店
- 東京電力(株)小田原営業所
- 株式会社 東華軒
- ト一ホ一建物
- 八小堂書店
- 八子マサ店
- 平井書
- 富士写真フィルム製小田原工場
- 株式会社 報徳屋
- 学生専科 丸マルク
- 食器の店 マルサンストア
- 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
- みみづく幼稚園
- ヤオマサ株式会社
- 山口菓子舗
- 湯浅電池製小田原製作所
- 防災器具 優光社



◎高田喜久三氏「近代小田原百年小史稿」紙面の都合により次号に掲載します。

◎次号の発行は一月を予定してあります。(陶生)

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員二千五百円

振替

横浜(2)六四三三六
小田原史談会会員部